

時代の感受性 (下)

加藤 純子



1、児童文学と社会性について

二〇一五年のノーベル文学賞受賞者は、ベラルーシのジャーナリストで作家のズベトラナ・アレクシエービッチさんでした。英米中心の文学から、文化や言語が越境する文学へと、グローバルゼーションは文学の世界にもひろがっているようです。それよりなにより彼女は、アフガン戦争の帰還兵やチェルノブイリ原発問題などの社会問題から目をそらさず書いている作家でした。

児童文学の世界では、戦後からずっと、社会にコミットした作品が書かれていました。いわゆる社会性の強い作品は、ある意味児童文学の特許でもありました。例えば「戦争児童文学」などもそうです。

しかしそういう流れの上に、いまだからこそ、社会にコミットメントしたあたらしい作品が生まれてきています。実際、いまの日本はたいへんな状況にあります。安保関連法案が次々と可決され、次にいまの内閣が狙っているの

は憲法改正です。日本を戦争のできる国にしようとしています。

そうした危機的ともおもえる状況や3・11に続く原発問題などを見据え、あらためていま「戦争」を考える。「原発」を考える。過去の戦争に学び、戦争をどう捉えるか……。そうした作品が生まれているのです。

日本児童文学者協会賞を受賞した『ヒロシマ』三部作(ポプラ社)のあとがきで、那須正幹はこう語っています。

「東日本大震災のテレビ映像を観たとたん、六十数年前の広島光景がよみがえってきた。被災者のみなさんも、おそらくあの日のわたしと同じ思いで、変わり果てた故郷をながめておられるだろう。しかしながら、人間はそれほど柔ではない。なんと打ちのめされても起き上がり、明日に向かって歩き出す生物ではないだろうか。それが六十数年前のあの日を体験した作者の実感なのだ」

この三部作は、お好み焼き屋三代記という原爆投下の後